

1.背景と目的

1-1.地域の文化・風土を伝える邸園の重要性

地域に残されている邸宅や庭園には、長年育まれた歴史や文化が受け継がれている。しかし、その貴重な遺産は、投機的な宅地開発や新規住宅建設によって壊されることが増え、街並の連続性や風土性が途絶え、文化景観が失われ、街の個性が失われている。

1-2. 湘南ひらつかの邸園文化

湘南地域には、明治・大正・昭和に保養地としてはじまり、財政界の要人、実業家、富裕層や文化人達の交流の地となり様々な文化を育んできた。を発信してきた。平塚の JR 東海道線以南地区も明治から海浜保養地として杏雲堂病院が立地し別荘地として発展した。しかし、火薬工場（火薬廠）をはじめ軍需産業が多数立地することによって戦災を受け、街全体が焼けてしまったが、袖ヶ浜、松風町、八重咲町周辺の街には、現在も松を中心に緑が色濃く閑静な住宅地環境が残り、かつての湘南の邸宅文化の風情が残されている。

1-3.藤田邸の価値

藤田邸洋館はもともとは岩倉使節団に同行した団琢磨氏が建てた「シロヤ」と呼ばれる洋館である。それを琢磨氏の息子団伊能氏の教え子であった藤田経世氏が譲り受け、現在の平塚市松風町に所在する。譲り受けた藤田氏は、神奈川県で活躍した日本美術史家であり、この洋館は文化・芸術的教養のある人達に利用されてきた洋館である。(Fig1/Fig.2)

	・シロヤ（藤田邸洋館）変遷
	1911 團琢磨氏原宿に居を構える
	シロヤ建設
	1923 團伊能氏結婚
	1932 明治通り竣工
	1934 藤田氏シロヤ移築、平塚に移転。
	2000 團伊能氏、藤田邸訪問。
2009 藤田邸人手に渡る	

(Fig.1/Fig.2)原宿邸内シロヤ位置/伊能氏夫妻写真（藤田邸内酷似）

1) 歴史・文化の価値と評価—藤田家住宅調査報告書—

「内外ともに質の高い意匠を持つ藤田家住宅洋館は、平塚の近代における住宅の中で貴重な建物である」と評価されている。

1-4.目的

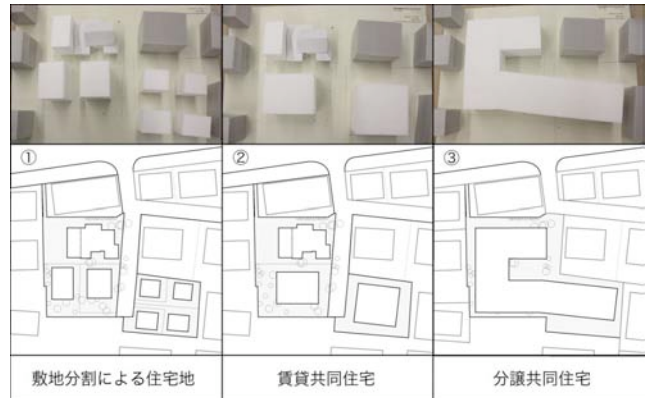
文化的価値のある住宅と庭園を、世代を越えて引き継ぎ、継承していくための建築手法を、藤田邸洋館を対象とし検討する。

2. 調査・分析

2-1.藤田邸現況

現在の藤田邸は、枯山水のある松並木と芝生広場を南側に置き、洋館は客間、和館が母屋として利用されていた。洋館部分は東側の妻梁から上部の柱を露出させたハーフティンバー、開口部は斜め格子がついている。玄関口は洋館に付属しているが、欄間や開口部をみると和風の意匠であり、和と洋が混在している特徴をもつ。庭は緑豊かであり、背の高い松が多く残っている。南側には藤田経世氏が自らつくった、川の流れをモチーフとした枯山水がある。また、家主藤田敦子氏のヒアリングから思い出深い残したい木々があった。ところが 2009 年に家主の高齢化、維持管理増大等の問題で洋館再築の条件で人手に渡った。新たな持ち主は隣接駐車場を購入し個人住宅をつくることになった。まずは安心であるが再譲渡などを考慮すると文化遺産を継承する難しさを感じる。そこで、旧藤田邸と隣接地を一体の敷地として洋館を残して更新する方法を研究する。

(Fig.3)



(Fig.3)藤田邸・隣接地の開発可能性

3. 提案

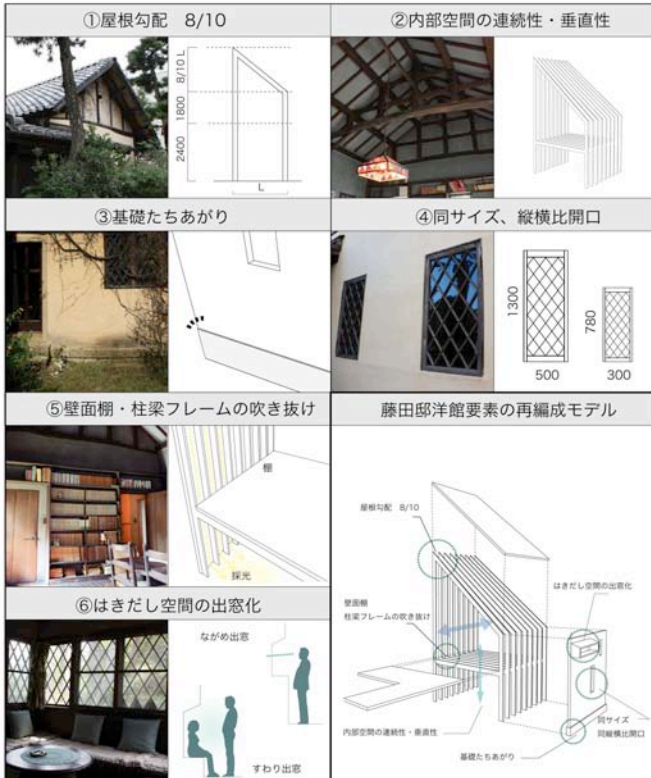
3-1.生活が文化をつくる

住宅は使い続けられることが文化の継承に繋がると考える。そこで施主が持続可能に継承できる方法として、洋館と庭園を共用部として活用し、施主が棲みながら共用部分の管理費を生み出す集合住宅を計画する。そして住民が協力しあいながら維持管理・利用・生活していくことで邸園文化を継承していく環境づくりを目指す。

3-2.「邸園」を尊重するデザイン

藤田邸洋館と庭園を継承するためのデザイン要素をそれぞれ

抽出し、それを元にした新たなデザインによって藤田邸洋館の個性を再編成する住宅をつくる。(Fig.4)



(Fig.4)藤田邸洋館の魅力要素と要素再編成モデル

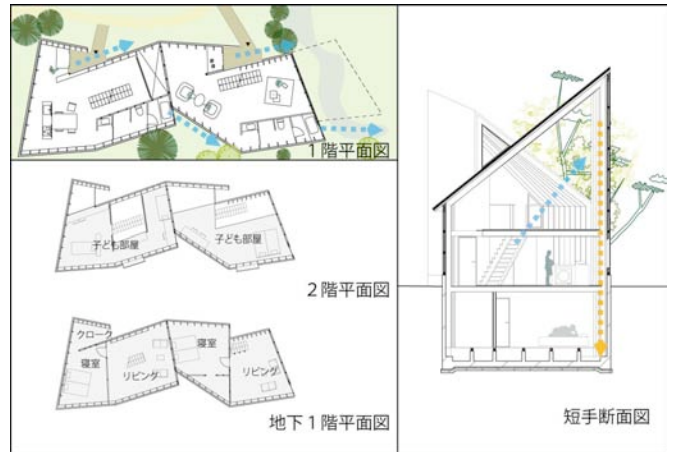
4. 建築計画

本計画では、配置計画として湘南邸宅の構成を色濃く残されている洋館と庭を残し、それを取り囲むように、地下1階地上2階の住宅を基本とした7戸を連続した集合住宅とする。洋館は共用部分としてコミュニティスペースと各戸へのアクセスのためのエントランスホールを兼ねた建築として活用する。庭園にあった枯山水を延長し、庭に流れをつくる。また、枯山水の通る住居部分は少し建物を浮かすことで、枯山水を守り、洋館からの視線の抜けや風の抜けをつくりだす。(Fig. 5)



(Fig.5)配置図兼1階平面図

空間構造は片流れ屋根の連続した門型フレームで構成する。ユニットごとに屋根を切り変えスカイラインの変化と壁をくの字に変化させることによって、ずれを発生させることで庭園との連続性をつくり出し外部へ開くなど開放的な住空間を実現している。門型フレーム内は収納棚や家具として機能させると共に床部分を透明化、吹き抜けとして下階への光の誘導装置として計画している。2ユニットで1住居とし、基本的に地下1階、地上2階建てとする。地下1階、1階部分の天井高は低めに設定し、吹き抜けを設ける事で、上部への開放性を感じさせる。(Fig.6)



(Fig.6)2住居の平面図／短手断面図 庭園への連続性

5. 結び

藤田邸洋館の諸要素から構成された新築住居は、洋館や松など自然にも調和する。そして利活用された洋館を中心に人が集い、古くから残る土地をみてきた松の大木、藤田邸洋館を皆で守り、そこで生活し続けられる場、邸園文化を継承する環境が作れたと考える。(fig.7)



(Fig.7)2住居の平面図／短手断面図 庭園への連続性

参考文献

- 1) 「浜辺の憩い 湘南別荘物語」 島本千也著
- 2) 「藤田家住宅 洋館調査報告書」 平塚市藤田邸調査団
- 3) 「図説近代日本住宅史」 内田青蔵他
- 4) 「再生名住宅」 足立裕司他